第一外科 130 周年に寄せて
～血管外科のレゾンデートルを問うのは今か～

保 科 克 行
（平成７年卒）

武藤徹一郎名誉教授が東京大学外科学講座再構成の大鉈を振るわれて、第一外科が大腸肛門外科と血管外科の、“傍から見ると”歪とも見られかねない構成となって久しい。なんで大腸と血管が一緒なの？の質問は、特に血管外科のチーフとなってから、他学の教授連から医学生にいたるまでよく頂くFAQ(frequently asked question) である。ことは医学部だけではなく東京大学全体の問題であったり、旧ナンバー外科の関連病院や人員の問題であったり、システムや政治の問題でシンプルな話ではない、と聞き及んでいる。ただそういった質問が増えてきたのは、ステントグラフト治療をはじめとする血管内治療の短期間での爆発的な広がりによって、心臓・血管外科領域治療のパラダイムシフトが起こり血管外科という分野がそのレゾンデートルを獲得したからかもしれない。メッサーと言われるわれわれ外科医が、右手にメス、左手にカテーテルを持ってこれらを巧みに使いこなしこれまでにないほどのパフォーマンスを示すというのは、外科の歴史の中でも例を見ないドラスティックな革命である。血管外科とは何か。消化器外科の中で血管を扱い吻合できる小器用な「なんでも屋」ではなく、心臓血管外科の末梢分野でもない血管外科という一つの独立した科を世の中に十分に周知することは、心臓外科医や循環器内科医が片手間に行った治療で不幸になる患者を減らすことにつながるし、なにより先達の培ってこられた血管への深い知識と技術と経験とその良好なアウトカムを、今まさに世に知らしめることにつながる。

血管外科の新規入局者のバックグラウンドをみると、それがよく理解できる。今まで第一外科では関連病院で主に消化器外科の修練を積んだいわゆるチューベンが４月に医局に戻ってきて、彼らが大学院受験申請を行う７月までの３か月で血管外科へのリクルートを行うというのが年中行事であった。これは第一外科という大所帯だからこそ成り立つ、歪な構造の逆手をとったもので、血管外科領域施設でとびぬけた医局員の多さは他大学の医局からは羨望の的である。しかし今年の入局希望者は、心臓外科出身者が２名、他領域の外科医局から飛び出してきた１名、将来の救急救命分野を志望する者が１名であり、前述のリクルート方法はこの３年成り立っていない。また今までほとんどなかった、レジデント・研修医の段階で血管外科をすでに志望するという奇特な者も増えている。血管内治療がやりたくて放射線科を当初希望したが、バイパスというリーサルウェポンを持ちつつ同治療も可能という血管外科にしました、という若者もいる。時代は変わり、画一的な外科医像も変わる。ダイバーシティに合わせた人事、若い人が集まる働き方も再考しなくてはならない。その新しい風は来年の働き方改革を控えた今、本邦のほとんどの外科医にとって厳しい寒風となるも、われわれにとっては希望に満ちた追い風となりうる。

第一外科という枠組みの中で、石原聡一郎教授には血管外科分野が大きく変貌してきていること、また可能な限りの独立性が必要ということでは十分なご理解をいただき、人事や運営全体に関してほぼお任せいただいている。好きにやれ、と放牧してもらったところで、多施設研究レジストリー構築をして超短期間で publication を含めた成果をあげ、医工連携を長らく行い多くの大学院生の博士号獲得の仕事とし、学生やレジデントとリクルートしての血管縫合トレーニングイベントを行い NHK で放映されるまでに至り、

他に類を見ないホームページ（https://vascular-1su.jp/）を作成して評判を博した。人事は、本邦の血管外科発展のため症例の多い教育的な施設に人を送り、本人の修練経験の希望を聞き、ご家族の希望までを考慮した大胆な、だれもがハッピーとなる人事を目指してきた。このような試みを地味に積み上げていき、第一外科全体の大いなる業績と歴史の中できらりと光る砂金でありたい、そしてそれらが血管外科のレゾンデートルたらしめたい、という小さな野望を持つ。

あとこれは些末なことだが、一外の某先輩の強力なバックアップをいただき血管外科ゴルフ部を設立した。昨今は私生活や酒席においても弾ける若者は少なく、せいぜいプロテインを飲んで筋トレをするのが関の山である。そんな仕事人間の後輩たちのために、あっという間に訪れるであろう第二の人生を想定し趣味やスポーツなど打ち込むものが必要であると考え、やむなくゴルフという一つの選択肢を用意した。すでに血管外科からは数人が初心者としてクラブを握り、大腸外科からも参加者がある。私としては気が進まないながらも年に最低 5-6 回はコンペを行っている。時には妻たちも参加して和気藹々とラウンドするが、家庭円満に寄与することは間違いない。部員は随時募集中である。

このように全方向に配慮しながら当科は運営されているが、われわれの本分は病と闘うことであることに変わりはない。個人的なことを言えば昨今はシャンクとドライバーのスライスという二大疾病と闘っており、ゴルファーとしてのレゾンデートルが今まさに問われている。